住民活動②

深山幽谷に残す源平合戦の悲恋

徳島・東祖谷山村
祖谷平家まつり

武家屋敷や平家の赤旗、二重かずら橋などが残る徳島県東祖谷山村。この地に伝わる平家伝説は、屋島の合戦に敗れた平国盛が安徳天皇を奉じ手勢一〇〇余騎を率いて、讃岐山脈を越え、阿波の吉野川をさか登り、今の井川町で一月半ほど留まったが安住の地とはならず、さらに奥深い四国山脈の祖谷山に入ったというもの。

地元の人でも忘れがちな伝説を若者に伝え残したいとの思いから始まったのが「祖谷平家まつり」だ。村内にはそこかしこに「祖谷平家まつり」「そばの里東祖谷」と書かれた平家の赤旗にちなんだ幟が立っている。人口二三〇〇の村に昨年はなんと二五〇〇人の観客が集まった。

開会式には村内はもとより姉妹村の宮崎県椎葉村などからの参加もあり、会場の歴史民俗資料館は満員、そして熱気に包まれた。祖谷衆太古保存会「童衆」の力強いばちさばきで「芸能の夕べ」の幕が切って落とされた。

ミス春姫も発表された。今年のミス春姫に決まった東祖谷中学校で保健の先生をやっている藤中美和さんは、「四季の移り変わりの美しさと二重かずら橋のPRに努めたい」と抱負を語った。

一夜開けたまつり本番の朝九時。役場隣のメイン会場では子どもたちの鼓笛隊による屋台のオープニング演奏が始まった。屋台では子どもたちが学校の畑で育てた源平いも（小ぶりのジャガイモ）や地元特産のコンニャクを使った田楽、大学芋などを販売する。他に名物のそばや

婦人会、生活改善グループなどの屋台も出て、村をあげてのまつりとなっている。

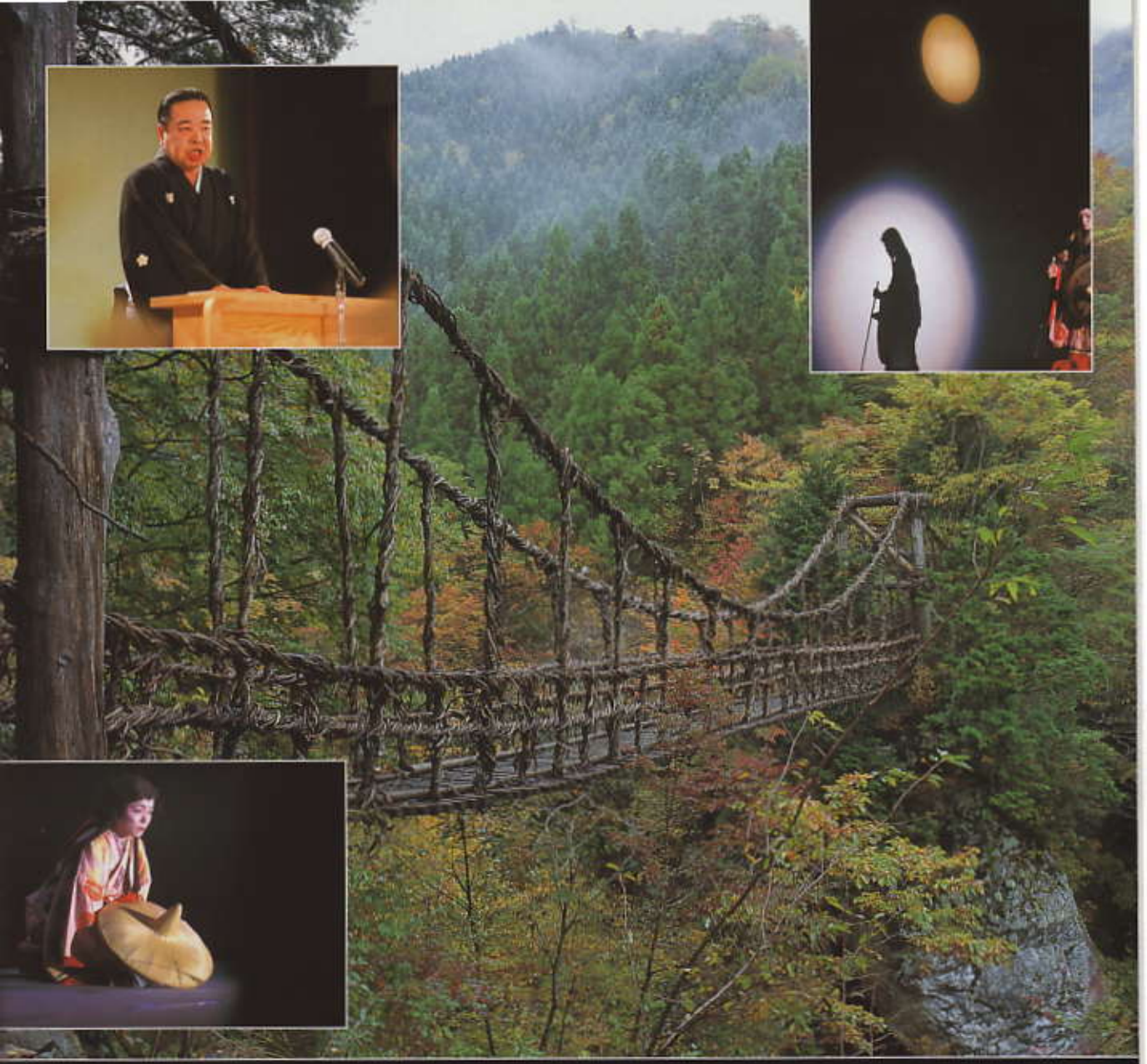
一方、午後二時からスタートする武者行列に出演する武者たちも、役場二階で衣裳合わせと最終リハーサルだ。役場の中は出演者やスタッフでごった返している。

役場前では衣裳合わせを終えた出演者の記念撮影が始まる。そんな中、修験者役の県議会議員がホラ貝の練習をしている。良い音色を出すのはなかなかむずかしそうだ。「記念写真に音が写ると困るわ」と軽口を叩けば、「議員がホラ吹いたらいかんわ」と撮影者。鎧や刀は思いのほか重くはないそうだが、かなり動きにくい。昼飯を食べるのもままならず、介添えの人に食べさせてもらう。

武者行列がスタートする少し前から、高知や香川ナンバーの車がやってくる。村外からの観客も多い。一時半になると出演者はマイクロバスに乗り込み次々とスタート地点に向かう。

武者行列の出演者は、地元住民はもとよりインターネットでも募集した総勢六一名。

午後二時一〇分、狼煙代わりの花火が打ち上げられ轟音が谷中に響きわたる。いよいよ武者行列のスタートだ。郵便局前をスタートして歴史民俗資料館までの約四〇分の道のり。修験者四人を先頭に、旗持ち、弓持ちが続き、板場哲也さん演じる馬に乗った平国盛、御輿に担がれた安徳天皇や春姫、建礼門院などが続く。鎧甲に刀や弓、装束などは京都の業者から借りてく



る。映画やテレビなどで実際に使用されているものだけあって、武者行列は観るものの心を八〇〇年の昔にいざなうには十分だ。行列は一歩一歩右斜め前、左斜め前とゆっくりゆっくりと進む。途中馬が糞をするのもこのようなまつりの"付き物"だ。

歴史民俗資料館到着後は武者を一人ひとりを観客に紹介し、そのまま立体講談劇へと移る。

会場は文字通り足の踏み場もないほどの超満員。住民の期待感が伺える。

観衆の中には物語の内容に涙する人もあるという立体講談劇。今年は昨年の続き。平家滅亡から三〇〇年の時を隔てて東祖谷の里で繰り広げられる平家と源氏の因縁が題材だ。今回は春姫が阿佐家の姫となる。

会場の照明が落ち、講談師が拍手に迎えられ高座に着く。幻想的な音楽とスモークに包まれた会場に平家と源氏の武者がなだれ込んでくる。冒頭は平家物語の再現シーンだ。

その後三〇〇年前の出来事を春姫が回想するシーンを織り交ぜながら舞台は進行していく。一度は許嫁となった小次郎が実は源氏の末裔であることが父から明かされ結婚の夢はかなわない。それを聞いた春姫は、「三〇〇年のわだかまりを捨てられないのは悲しい…」と言葉を残して落命する大団円。観客からは惜しみない拍手がわき起こった。

■連絡先＝徳島県東祖谷山村役場
TEL〇八八三―八八―二二一一